

## 豊明希望チャペル礼拝

2024/12/1

「彼らは私に仕えるようになる」

使徒 7 : 1~16

月の第1週は、使徒の働きから教えられています。

今日は7章から教えられますが、6章に入って、教会は大きくなり、使徒達のいわば補佐役として、7人の人が選ばれます。そのうちの一人がステパノという人で



す。6章ではその役割は、貧しい人たちの、お世話でありました。

この7章の最後では、彼は、神を冒瀆（ぼうとく）した罪に問われ、石打の刑を受けて殉教します。これが、キリスト教会の歴史上、最初の殉教者ということになりました。本日は、その箇所、前回に続き、今日からは、罪に問われたステパノの長い弁明のはじまりとなる箇所です。

さて、そもそも、ステパノは、当時の権力者であったユダヤの指導者達に、何を問題にされたのでしょうか。前回の箇所になりますが、それは、彼のこのような発言にありました。それが彼が実際に言ったことかどうかは別としても少なくとも、それが理由になりました。前回の箇所を今一度、引用します。

「6:14 『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」ということです。

イエス様の二つの発言を彼ステパノが言ったことに対する問題でした。

一つは、(1)イエス様が「この(神殿)聖なところを壊す」ということ、もう一つは、(2)イエス様が、「モーセが私たちに伝えた慣習を変える」と言われたことでした。

ちなみに彼らの言う、イエス様が聖なところを壊すと言われたのは、ヨハネの福音書2章の箇所です。「2:19 イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」と言われた箇所です。7章は、この二つのユダヤ人の指摘に対しての、ステパノの反論ということになります。

(1)については、48 節で、神はそもそも、神殿になど住んでいないと、ユダヤ教のかなり根源的な問題における反論になります。イエス様を弁護するどころか、イエス様の言われた意味をさらに深く掘り下げ、正面から、イエス様の思いを弁明し、ぶつけます。

(2)については、そもそもモーセが伝えたことの中に、まことの預言者であり神であるイエス様が、モーセに次ぐ者であってこれに聞くようにと、**モーセ自身がイエス様に聞けと、言っているのだと反論**します。(：37)

今回の箇所は、そのステパノの反論、あるいは説教の最初の1節から16節までの箇所になります。ステパノは、アブラハムと、ヤコブの12人の兄弟のひとりヨセフに視点をあてて、弁明、説教します。

ちなみに、このあと、ヨセフの続き(7:17~22)、モーセ(~53)をとりあげて、弁明、説教します。ただ、全体で見ると、アブラハムの話は、ヨセフへの導入であって、今回は、**ヨセフの話し第一回**、次回17節以下が**ヨセフの話し第2回**という内容になります。

「7:1 大祭司は、「そのとおりなのか」と尋ねた。7:2 するとステパノは言った。「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。私たちの父アブラハムがハランに住む以前、まだメソポタミアにいたとき、栄光の神が彼に現れ、7:3 『あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地へ行きなさい』と言われました。」



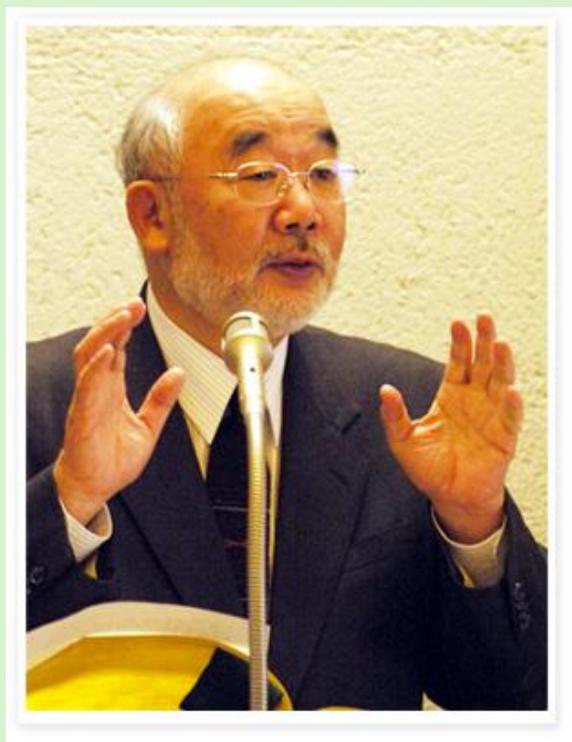
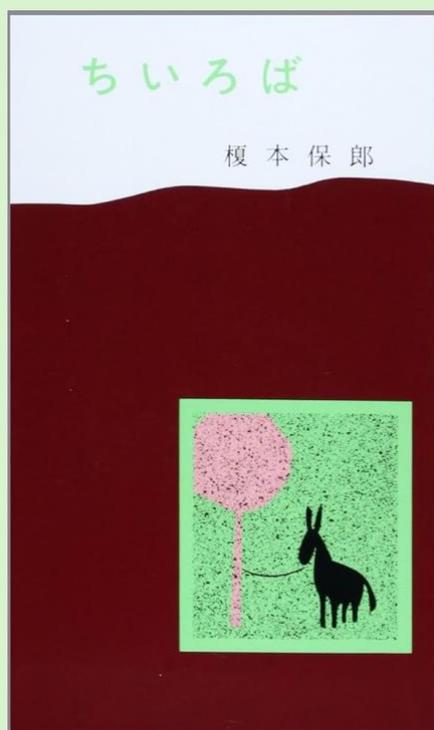
メソポタミアは今のイラクあたりになりますが、今のイスラエル、パレスチナともよばれるその地に行くように示されます。アブラハムは、あらたなアブラハムの子孫の将来の地に出発しますが、問題は、アブラハムに高齢になっても、子どもが与えられないということでした。祈りますが、与えられない。彼は、ついに、奴隷にアブラハムの子を産ませますが、神は、あくまで、アブラハムの妻サラとの間の子で

なくてはならないと言われます。

しかし、ついに約束通り子どもが生まれました。それが、この 8 節までに書かれていることです。ステパノは、このように締めくくります。

「7:8 そして、神はアブラハムに割礼の契約を与えられました。こうして、アブラハムはイサクを生み、八日目にその子に割礼を施しました。それからイサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長たちを生みました。」

さて、旧約聖書を、いわば、ステパノの視点で読んでいくという営みとなりますと言いました。ひとつの話しを誰かの視点で読むと言うことは、その人の考え方とか思想が反映することとなります。もちろん、私とその聖書を語る時、私の信仰や、考え方が、良いにしても悪いにしても、多かれ少なかれ反映します。ここからは、私も一緒に聞く者として、ここを解説している、ある人の視点でお話しできればと思っています。



今回は、あのちいろば先生の弟さんで牧師の榎本栄次先生のお話から読み解いていきたいと思います。「ちいろば」というこの本を書いたのは、榎本保郎という牧師です。兵庫県淡路島に生まれ、最初の教会は、K兄の故郷、今治市の教会で仕えた方ですが、その弟さんも同じく、淡路島で生まれ、保郎牧師と同じ同志社大学神学部を出て、北海道で開拓の働きをされ、保郎牧師のあと、今治の教会で同じく牧会されました。その彼が、今日のここまでの箇所をして、このように語っています。

アブラハムは、カナンの地に来て、豊かになってはあったが、子どもがいない。海の砂のようにするとの約束で出てきているから、彼らはまたも、自分の力でがん

ばっちゃん、神様の約束を自分達でなんとか実現してやろうと、ハガルという奴隷に子をませる。これで夫婦関係がダメになる。神様は彼らにそれでも子どもが出来ることを約束します。サラとアブラハムはそれぞれ、もう 90 歳と 100 歳になっています。ついに、来年の今頃出来るだろうと告げられました。サラは笑います。天の使いから、あなたは笑ったねと言われます。ただその笑いは、楽しくて仕方ない笑いではありません。楽しい笑いは人を健康にしますが、笑いには、絶望の笑いもあります。そんな馬鹿なことがあるか。そう、それは笑止千万と言う意味、絶望の笑いでした。ところがそれから一年後、イサクが与えられる。21 章。イサクは笑うという意味です。しかし、それはもはや絶望の笑いではなくて、心の底から笑う。笑いの大転換が起きたのでした。と。

ステパノは、そのいわば、**大転換の神の奇跡の計画**を人は、アブラハムが当初そうであったように、なかなか信じられないのだということです。あるいは、一つの出来事の、一見、絶望とさえ思えるような状況の背後に神は計画を持っているものだということです。

このことは、イエス様が十字架につけられて、絶望の中にあるようにみえて、実のその十字架の背後に神の壮大な計画があるのであって、そのことをあなた方は、見逃していると言うことを言いたいのですね。

ステパノは、このアブラハムの出来事には、神の壮大な計画があったということです。それは、単に赴任の夫婦に子どもが与えられたというだけではなくて、その子どものさらに、その子ども（孫）にまで及ぶ、その世代になって、はじめてわかるような、神の長期計画、壮大な神の導きたもう不思議な計画があるのだというの



です。それが、今日の、後半部分です。ヨセフの話しになります。

ヨセフは、ヤコブの 12 人の息子の中で、11 番目の子どもになりますが、父親から特別に可愛がられる者ですから、上のお兄さんたちの嫉妬をかって、殺されかけます。穴に放り込まれますが、死んだと思っていたら、生きていて、運良く（悪く？）、エジプトへの隊商に拾われて、エジプト人に売り渡されますが、時は過ぎて、不思議な神さまの導きの中で、ついに、エジプトの大臣にまで上り詰め、そのことは、巡り巡って、イスラエルで飢饉（ききん）があったとき、ヤコブと、その子達、すなわち、ヨセフの兄たちとその一家を、一家全滅の危機から救うことになったのです。

「7:14 そこで、ヨセフは人を遣わして、自分の父ヤコブと七十五人の親族全員を呼び寄せました。」

それで、ヤコブ一家は、エジプトの地で命を繋ぐことになって、豊かなエジプトの地で、その子孫となるユダヤ人は、肥え太り、子どもがたくさん生まれて、エジプトから脱出するときには、ヨセフの時代に 75 人だったアブラハムの子孫のヤコブ家は、壮年男子だけで 60 万人を数え、エジプト人から、自分たちの民族より多いと恐れられたのです。

ステパノは、一見、絶望のように見える、あるいは、死と思えたヨセフの結果が、数十万人数百万人の祝福となる神の計画があるものだ、我らユダヤ人は、その神の計画の不思議を経験し学んできた民族なのだというのが、今日の箇所なのです。

いったい、ステパノは、この説教で、ユダヤ人たちに何を言いたかったのでしょうか。

最終的には、7 章の終わりにかけて、語りますが、ここまでのところでも見えてくるのは、いわば、ヨセフはイエス様の型、ひな形、あるいは、予告なのだという事を言いたいのだろうと言うことです。

すなわち、あなた方ユダヤ人は、イエス様を誤解しているということです。イエス様こそ、ユダヤ人を救うことになるヨセフなのだという事です。

兄たちが弟ヨセフを殺したが、そのヨセフが、いわば、穴からよみがえって（兄たちにはそう見えたあろう・・・）何十倍何百倍、何万倍の祝福をあなた方に与える人になることを理解しなくてはならないと言うことです。

榎本先生は、そこから今の私たちに対するメッセージをくみ取り、こう言われます。

人生には、絶望と思えることがたびたびある。たとえば、ヨセフに対して、不安になった。ヨセフが、父の愛情と、ひいては、父ヤコブのもつものを全部奪ってしまうのではないか。それで、アブラハムがかつてそうだったように、人間的な方法で、すなわちヨセフをなき者にするという、きわめて、極悪で人間的な方法で解決しようとした。しかし、私たちは、神の深い計画に心をとめ、人間的な方法ではなく、神に委ね、神に信頼して歩まなければならないと。



こんな彼の体験談を語ります。三浦綾子さんは、彼のお兄さんである榎本保郎牧師を題材にした「ちいろば先生物語」を書いておられますので、その関係で親しくされていました。「去年の夏（一昨年）、お見舞いに行った。綾子さんは、座ってられない。御主人の光世さんに手をとって支えられないと。綾子さんは、そんな中、ぽつぽつと語られた。幻覚が見えたりするような状態の中でこう言われた。「神の前には絶望と言うことはぜったいにない。人が絶望するとき神との交わりがかえって深くなる。神の前に平安が保証される。絶望させられるときほど。絶望されるときほど平安なときはない。人は絶望する。クリスチャンも絶望する。もっているものがなくなることもある。健康も、財も。「ねえ英次さん。愛情というものは20歳代の愛情と80歳の愛情と違うのだろうか。」と言う。そして、綾子さんは言うのですよ。「やっぱり同じだと言う。光世さんが、私が10分程家を留守にするだけで、やきもちを焼く。困ったものだという。そして絶望するのだというのですね。「光世さんは他の人と・・・」なんて思うのだとか。綾子さんも絶望する、人は絶望する。神様を信じて、もちろん御霊によって取り扱われ、性格が良くなるという面もある、しかし、それもあるが、病気で脳の働きも悪くなり、体もたたなくなり、ペンも握れなくなり、しわも増える、だんだんと、そしてついで、何もかも絶たれてなくなったとき、（絶望する）ただし、そのことを通して、かえって本当の平安が与えられる。神さまの側からの平安が私たちを捕らえるものだ。聖書は、私たちにそのように教えているんだなあ。と思わされた。

さすが、文才のある方々は、ここまで黙想するものだと言われたのです。

私たちも絶望する。しかし、そのとき人間的な解決ではなく、神を信じ、信頼してあゆまねばならない。ステパノのユダヤ人の同胞への、それは、叱責であり、

同時に、励ましであったのかもしれませんが。私たちは神を信頼して裏切られたことは結局ない。キリストに絶望したが、今、キリストを信じよと。

今週の歩み、私たちは絶望してはならない。

どんな状態の中でも私ではなく、神への感謝と讃美と平安を与えられる神様に信頼して歩む今週の歩みとさせていただきたいと思います。